

経済マンスリー

[原油]

原油市場を取り巻く環境（10月）

1. 原油価格の推移

原油価格は、サウジアラビアの石油関連施設への攻撃を受けた供給懸念から、9月中旬に一時63ドル台（WTI期近物1バレル当たり、以下同）まで急騰したが、各国経済指標の弱含みや米中対立の先行き不透明感等を背景に弱気な需要見通しが優勢となり下落、10月中旬には52-54ドル台での小幅な値動きが続いた。その後、12月に開催予定のOPEC総会及びOPEC・非OPEC閣僚級会合で原油の減産幅拡大が検討されると報じられたこと等により再び56ドル台まで上昇するも、最終週に発表された中国の経済指標を受け、中国经济の減速に伴う原油需要の減退懸念が高まり、足元では54ドル台で推移している。

2. 需給の動向

(1) 需要

7-9月期の原油需要は10,129万バレル（日量、以下同）と、世界経済の緩やかな拡大や原油価格の下落が需要を下支えし、前年比+1.3%と増加基調が続いている。

(2) 供給

同期の原油供給は9,994万バレルと、OPEC等による協調減産により前年比▲1.2%となった。まず、協調減産に参加するOPEC諸国をみると、サウジアラビアでの供給障害を主因に9月の産油量は2,488万バレル（減産順守率236%）と単月で大きく減産となった。もっとも、生産の基調を規定するのは協調減産持続の方であり、同国の産油量が10月末時点で攻撃前の水準まで回復しているも、OPEC諸国全体では依然前年比で減少傾向である。

他方、米国シェールオイル生産量は、781万バレル（7-9月期）、前年比+15.9%と依然増勢を保っている。もっとも、原油価格がシェールオイル生産の採算目線とされる60ドルを割って推移している中でリグ稼働数の減少が継続しており、流石に昨年までの右肩上がりは続かなくなっている。先行きについても、増産ペースの鈍化が続く可能性が高い。

3. 今月のトピックス

上述の結果、7-9月期の原油需給バランスは、6四半期ぶりに需要超過に転じた。但し、これはやはりサウジアラビアの供給障害の一時的影響によるもので、今後の需給は概ね均衡で推移するとみてよいだろう。需要面では世界経済の減速による需要の伸び鈍化が継続することが予想され、実際、国際エネルギー機関（IEA）は10月の月報で2020年の原油需要の見通しを前回9月の見通しから10万バレル下方修正している。供給面ではサウジアラビアとロシアがOPEC・非OPEC諸国の恒久的な増減産の協調に合意しており、引き続き需給均衡を目指して、需要に合わせた供給量の調整を実施していくとみられる。

